マシュマロブーム

◆この「シマザキワールド」は、前にも述べた通り内容は全て当方にお任せという本誌創刊者の故中沢孝さんの「発明」による不定期の珍連載なのだが、今回は「ぜひマシュマロピューパも入れておいてください」との御要望が現編集人からあった。珍しくそんなリクエストをしてくるところをみると、ブームというほどのことはないにせよ、何となく気になる存在ぐらいにはなりかけているもののようだ。こういう流れの仕掛け人は御存じ備前貢さんである。昨年（2011年）から今年にかけて『FlyFisher』誌の連載や御自身のブログなどで何度も採り上げて戴いたばかりか、新刊の御快著『Happy Tyer』（つり人社）でも何と丸ごと1章を割いてくださった（!）という異例の御支援の賜物だということも、皆さん先刻お気づきの通り。北海道に移住した備前さんは、かの地で必携の大型ドライフライを、軽くて水切れが良くてキャスティングもしやすい三拍子揃った実用的な形で「現場でもササッと巻ける」マシュマロボディの佳さを再発見した由で、天下一品の極上タイイング技術と深い知見に基づいた展開力でこのスタイルのタイイングの面白さと可能性を次々に形にしている。マシュマロ式の家元（?）の当方などもつくづく感心して、周囲の釣り仲間などにも「凄ェだろ。ちゃんとしたタイヤーが巻けばマシュマロだってこんなにカッコいいフライになるんだぜ」などと本を片手に脂下がったりしたものだ。

◆『FlyFisher』先月号（10月号）には天海崇さんの「〝マシュマロ〟をウイングにする発想」による「バブルウイング・フライ」という記事も載った。この面白い応用例については八木編集長からお気遣いの電話があったのだが、「どんどんやってくださいよ。フライというのはそういうものですから」と申し上げた。この「フライというのはそういうものですから」の出所を明かすと、かのリー・ウルフが、見たことも会ったこともない人によって『ウルフフライの正しい巻き方』のような記事や本が書かれていることについて、「ウルフスタイルというのはすでにカテゴリー化しているので自分がどうこういう筋合いではない」旨を確か『Lee Wulf on Flies』に書いていた件にあやかった次第。尊敬するリー・ウルフと当方では月とスッポンなのだけれど…。備前さんや天海さんのお蔭もあって、いまや〝マシュマロ〟も一人前にカテゴリー化してきた感なきにしもあらずだ。「それがもし本質を突いているなら、単純なものほどバリエーションが多くなる」という箴言があるが、釣りの世界では「魚が良く釣れる」ということが「本質を突いている」とほぼ同義なので、マシュマロ系の今後の発展が楽しみだ。ちなみに僕はいま、獣毛によるマシュマロボディの可能性を探求しているのだが、3年余り難儀した指が治ってきた（後述）こともあって、面白いものが次々に形になりつつある。これと並行してマシュマロ用に特化したシンセティック繊維の研究なども手がけているところだ。人工素材には天然素材にはない特性もあるので、両方ともそれぞれオモシロイ。

マシュマロピューパの15年

◆〝マシュマロ〟の作り方やタイイングの初出は、1997年（の何月だったかは失念）のティムコのホームページにアップされた「マシュマロ・エクステンション」という記事だった。Marshmallowというユニークなトレードネームの名付け親はそのころティムコの常務だった霜田俊憲さんである。マシュマロ「ボディ」ではなくて「エクステンション」としてあるのは、その時の解説や色々な作例写真でも示しておいたように、ボディ以外にも様々な使い方が可能だからだ。例えばバスフライのカエルの脚を模す用途もあるし、鮭などの稚魚のパターンを作ることもできる。ボディとして使う場合もマシュマロピューパのようにフックベンド側にセットするだけでなく、前方側にエクステンドさせる選択枝もある。これらの応用例は、当時のレベルではほとんど関心を持たれなかった。インターネットが今ほど普

マシュマロビューパ #13 と #11（TMC103BL と 102Y）。サイズはそれぞれの釣り場に合わせて、大体こんな感じに巻けていれば問題なく釣れます。

マシュマロシケーダ #6（TMC2302）。目玉はダテに付いているのではなく、目玉をタイイングに活用している。（目玉なしだと、こういうスッキリした収まりには中々ならない。）

マシュマロメガビートル。獣毛のインナーマシュマロボディ＋ピーコックスウォード。TMC2302#6

マシュマロプチバグ。ハックルセパレーター使用。TMC103BL#15

マシュマロシケーダ。目玉はギター弦（ラベラの黒の 1E 弦）。TMC2302#6